

# 隨泉寺寺報

平成23年(2011年)9月号 第493号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季彼岸会法座

講師 法明寺住職 原田 真澄師

講題 『よき人に導かれて』



## ■氷と水

今年も暑い夏でした。熱中症にかかってはと思い、「水分だけは取らないと」氷をずいぶんいただきました。ポットに麦茶を入れ、氷をいっぱいにして、のどが渴けばそれをガブガブと飲んでいました。

水と氷は一つのもですが、氷と凝り固まると、どんな器にも入れられるというものではなく、無理して入れようとすると両方が傷付きます。私達凡夫は、ぶつかり、相手に角があったから、相手が氷だからと、相手を非難します。しかし片方が水ならばぶつかりません。ぶつかった限りは両方ともが氷だった証拠です。

ぶつかることによって『わたしに角があったんだな』と気付かせていただくことが大切です。さらに『相手の人の角のお陰で、私の角に気付かせていただくことが出来て、ありがたかったな』と、相手の角を拜むことが出来たら、もっとすばらしいですね。お互いに心を運びあい、遠慮しあい、ときにはぶつかり、傷つけあい、また傷をあたためあいながら生活するなかで、自然に角がとれた、まるやかな人に育てられるのでしょう。そのとき氷が水にとけた時と言えるのでしょう。

## 9月の法座予定

- 9月11日……………掃除 上平原第2
- 9月14日昼席午後1時より……………秋季彼岸会法座
- 9月14日夜席午後7時より……………出張法座 上平原集会所
- 9月15日朝席午前10時より……………主婦の集い おとき
- 9月15日昼席午後1時より……………秋季彼岸会法座
- 10月 2日午後6時より……………門信徒会本部役員会

## ☆ お彼岸

お盆にお墓に参り、帰りに、僧侶姿の私に安心してか、見ず知らずの方が気安くお声をかけてくださいました。中年の奥さんが、「隣のお墓には、もうずっと誰も参って来られませんが、こんなことでは罰が当たりませんか」と真顔でお尋ねになりました。

「仏さまはお慈悲の方です。仏となられたご先祖が、かわいい子どもや孫たちに罰を当てたりされるはずはありませんよ。いつでも、どこでも、私たちを見守ってくださるのが仏さまですから。そんなことより、今度お参りされる時には、お隣さんのお墓にもお花とお線香をお供えしてあげてください。きっと大喜びですよ」とお答えしました。

また、何年か前には、九十二歳のおばあさんが、「お寺さん、私が両手あわせて『おかあちゃん、また会いに来たよ。こんなに長生きする丈夫な体に産んでくれてありがとう』と言うてお念仏申すとね、おかあちゃんの声が聞こえますね。お盆でも、お彼岸でも、いつでもです。」とお尋ねです。「それはな、おばあさん。

今日はあなたのかい性でお参りしたとお思いでしょうが、そうではありません。仏さまに成られたお母さんによばれて、ここへお参りされたのですよ。お浄土のお母さんは、ひと時の休みもなく、自分の歳をはるかに越えたあなたに、『いつもおまえを抱きつめの親がここにいるよ』と、よび続けていらっしゃるのです。だからその声がお念仏となって、あなたのお口からこぼれ出てくださったのにまちがいありません。あなたがお母さんを偲んでお念仏される時、あなたは仏さまと一つのいのちを生きていらっしゃるのですよ」と申し上げたことです。



私の口にかかってくるひと声のお念仏は、私に先立って「お願いだから、あなたのいのちのすべてをこの私にまかせて安心して生きておくれ」とおっしゃる、彼岸からの仏さまのよび声なのです。彼岸への道は彼岸からの道です。真っ赤に群れ咲く曼珠沙華(まんじゅしゃげ)や母の手作りのおはぎに象徴される秋のお彼岸には、お墓参りもさることながら、まず何よりもお近くにある親鸞さまのお寺にお参りし、家族そろって今お浄土から聞こえてくる仏さまのみ教えに耳を傾け、やがていつの日か、往(ゆ)きし人々との西方極楽浄土での再会を心に期して、西空に沈みゆく夕日に彼岸を想い、お念仏申したいものですね。



奈良・善正寺住職 石川 欣也(いしかわ きんや)

どうぞ、この彼岸の季節に、お墓参りと同時に、法座に参詣、聴聞され、此岸の世界で苦悩する私を救うと喚ばれる「仏の悲願」を聞信し、歡喜信受(かんぎしんじゅ)(まことのよろこび)の人生を送られることを、心よりお勧めします。

奈良・善正寺住職 石川 欣也(いしかわ きんや)

どうぞ、この彼岸の季節に、お墓参りと同時に、法座に参詣、聴聞され、此岸の世界で苦悩する私を救うと喚ばれる「仏の悲願」を聞信し、歡喜信受(かんぎしんじゅ)(まことのよろこび)の人生を送られることを、心よりお勧めします。

## ☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 山中寿子殿 故 山中 隆司様 特 永代経志として

## ☆御礼

門信徒会へ 金 一封 山中寿子殿 故 山中 隆司様 香典返しとして

9月

見えないところでひとつなぎりに

つながりあっている「いのち」

私のはじめて授けていただいた子どもが、大病にかかりました。お医者さまから、「お気の毒ですが、赤ん坊のこの病気は、百人中九十九人は助から」といわれているものです。今夜一晩のいのちを、私には保証することができません」といわれてしまいました。

その晩、幼い子どもの脈を握っていると、脈がだんだん消えてわからなくなっていくきます。いよいよ、親と子の れのときがきたかと思っていると、ピクピクッと、かすかに、脈が打ってきます。「やれ、嬉しや」と、思う間もなく、脈が消えていきます。いよ

いよ れのときがきたかと思っていると、また、ピクピクッと、かすかに、脈が動いてくれます。

そういうことを、何べんも繰り返しているとき、夜半十二時をしらせる柱時計の音を聞いた、あの感動は、何年たっても、忘れられるものではありません。

「ああ、とうとう、きょう一日、親と子がそろって、一緒に、一日を過ごさせていただくことができました。いまから始まる新しいきょうも、親と子が、揃って、一緒に、生きさせていただけなのであろうか」と、思わずには、おれませんでした。そして、学校で担任させてもらっている

六十人の子どもは、ただの六十人ではないということ、百二十人の親ごさんたちのいのちと、熱い願いにつながっている六十人であることが、ただごとでないことに思われてくるのでした。

見えないところでひとつなぎりに つながりあっている生きているのは 竹藪の竹だけではない 土手のすぎなだけではないということに、目覚めさせていただきました。

☆「おとうと」という映画を見ました。もちろんテレビの放映で

家族、兄弟、結婚、離、老い・・・

私たちの身近にあるテーマを、私たちの視点で描いています。

何をやってもダメで、誰からも疎んじられていた弟。その弟が、晩年暮らした「みどりのいえ」では、話術の上手さから人気者として、みんなから慕われていた。その事実を知り、姉役の吉永小百合は考え込む。「弟は本当にダメな人間だったのか？」そんなことを吉永と一緒に考えさせられる。

東京の郊外で、夫亡きあと小さな薬局を営み、一人娘の小春を育ててきた姉・吟子。大阪で何ひとつ成し遂げないまま歳を重ねてしまった弟・鉄郎。音信不 だった彼が突然、小春の結婚式に現れる。以前も吟子の夫の十三回忌で、酔っ払い大暴れした鉄郎。今日は一滴も飲まないと約束するが、酒を目の前にした鉄郎は我慢できず、酔っばらって大



騒ぎ、披露宴を台無しにしてしまう。激怒する身内の中、鉄郎をかばうのは吟子だけだったが、後日、ある出来事がきっかけで、吟子は鉄郎に絶縁を言い渡してしまう。肩を落として出ていく鉄郎の背中に不吉な予感を覚える吟子だったが……。

だめな弟をいつまでもほっておく事ができない出来た姉。映画を見ながら頭にきていました。あんなだめな弟、見限ってしまえ、いつまでもかばうから、結局いつまでもあまえてしまう・・・。

観ていてかなり怒りを感じさせられました。弟は姉の言葉をまともに受け止めない、弟の為に献身的な姉をみていて虚しく感じました。

人の死際に接するのは誰しも辛いもので、鉄郎の最期のシーンにはやはりジーンとなりました。夜目が覚めたら寝られないので怖いというのです。言いようのない不安がやってきて一人ぼっちで怖いというのです。お姉ちゃんが側にいてあげるよと、姉弟が互いの腕を紐で繋いで寝るシーン、紐でおとうとの腕を結んだとき本当にうれしそうな顔をします。最後のときに一番頼りになる人と結ばれていたらどんなに心強いでしょう。

なんで生きているんだろう、生きていても意味ないんじゃないか、なんて甘ったれた考えが頭をよぎる時もありますが、この作品を見て、哲郎の最期を見て、「ああ、こんな最期があるんなら、人生すてたもんじゃないのかも」なんて思いました。

この先辛いこともたくさんあるんだろうけど、幸せな時もある。哲郎みたいな死に際、最高です。ホスピスで人が亡くなるときの送り出し方、泣けました。「がんばったね。もういいんだよ。」どんな人でも死 時に一人は辛い。家族から見放される。行き場がなくななる。孤独な人達には行き場所がない。そして、死に場所さえない。”繋がり”が薄れていく今の世の中。

どうしようもない、懲りない人間であってもやはり一人では生きていけない。

支えあいながら生きていく。そのことの大切さ。そして、人の優しさと温かさが胸にしみる。そんな事を感じさせてくれる作品でした。

だめなだめな人間の哲郎が実は私のことで、そのだめな私を決して見放さないのは、仏様です。いつも裏切って、逃げていつている私。最後に腕を結んでいる紐は南無阿弥陀仏というお念仏なのです。

この映画は、生きる希望を見せてくれた気がします。

久しぶりに映画を見た感じです。なんで生きているんだろう、生きていても意味ないんじゃないか、なんて甘ったれた考えが頭をよぎる時もありますが、この作品を見て、哲郎の最期を見て、「ああ、こんな最期があるんなら、人生すてたもんじゃないのかも」なんて思いました。

